

山の辺文化会議「山の辺文化講座」 令和6年 1月20日 午後1時30分～3時

まんようびと ことだま

万葉人と言霊

奈良大学 国文学科 鈴木 喬

はじめに

実体験から：「いい子だから」「お前は○○になりなさい」と育てられる。

現代の忌み言葉（現代の言霊）災いがふりかかるのを恐れて口にしない言葉。また、その避けて口にしない言葉のかわりとして用いる言葉。

結婚式での「切る」「割れる」／受験での「すべる」「おちる」／スルメを「あたりめ」博打で「スル」を連想するから。 科学に生きる現代人において、根拠のないものに支配される。

なぜ、こうした忌み言葉が発生したのか？

ことばは事物を引き出す力があり、悪いことばは悪い事態を呼び起こすと考えた。不吉感を引き起こすことばを避け、別の語で婉曲的に表現することによって、災難から逃れようとしたのである。（現在ではこうした思想は衰微してきたため、忌み言葉も少なくなっている）

アニミズム的な世界観をもつ古代の日本人は、あらゆる事物に精霊がやどると考えていた。『古事記』や『日本書紀』の神様の名前に、山や海、風や木、火などの自然物に関するものや、剣や鏡などの生成物としてのモノが神格化される。古い信仰形態において、三輪山など「山そのものを」ご神体とし祀るものや、巨石や大きな木をご神木とする形態は現代の我々の中の信仰においても息づいている。

『常陸国風土記』鹿島郡条（鹿島神宮の由来譚の場面において）

「俗いへらく、豊葦原の水穂国を依さしまつらむと詔りたまへるに、荒ぶる神等、又、石根・木立・草の片葉も辞語ひて、昼は狭蠅なす音声ひ、夜は火の光明く国なり。此れを事向け平定さむ大御神と、天降り供へまつりき」

〔訳：土地の人々が次のようにいう。（八百万の神たちが）豊葦原の水穂の国を、ご委託申そ

うとおっしゃったときに、「荒れすさぶ神たちや、また、石・木立・草の一葉までもモノを言い、昼は五月の蠅のように騒ぎたて、夜は妖火のかがやく国である。これを従わせ平定する大御神」と神たちがおっしゃったので、天から降って皇祖神にお仕え申されたのである」

※全ての事物に魂が宿るとされ、「石・木立・草の一葉までもモノを言う」世界観が存在した。またそれらの靈威は、かつては言葉が発していたという。

※日本では、長い間使われてきた道具には靈魂が宿るという考え方絵がある。それが「付喪神（九十九神）」。大切に使われた道具は九十九神となって幸福をもたらし、粗末にあつかつたものは付喪神となって人に災いをおこすとされる。九十九を「つくも」とよむのは、「つくも」がもともと「ツツモ（次百）」の意味だとされる。こうした信仰から、神社仏閣には、長年愛用した道具を供養して埋納する、筆塚、針塚、包丁塚などがある。針供養などは、使えなくなった針を豆腐、こんにゃく、大根などに刺して寺社に奉納して供養すると、裁縫が上達されるという。

▽「魂」が宿るのは、「言葉」も同様で、万葉集の歌に「ことだま」という言葉がつかわれている。これは万葉びとが言葉にも精神的な力が宿ると考えていたことをさす。

▽折口信夫（『日本文学の発生』）は、言葉に精霊が宿るとし、呪詞の唱えられることによつてそれが目をさまして活動し、作用すると指摘する。言葉に内在する、あるいは作用する力が、人の幸・不幸も左右すると考えていた。そしてそのような信仰は、さまざまな習俗となつて伝承されている。言葉には靈力が宿り、その靈威が発揮されると、その言葉通りの事が実現する、とする観念があつた。それが「ことだま」だと考えられている。

▽さらに折口信夫（「伝承文芸論」）は次のように述べる。

つまり、言語精霊が不思議な作用を表すといふことが、言葉のさきはふといふ意味です。さういう言語が、古代の日本の国に伝つて居て、それを忘れてはいけないといふので、一所懸命に失はないやうに伝承して居たのです。そしてそれが日本の文学の始りとなつた訣（わけ）です。

※言葉の力を信じなくなった人がいる、だからこそ「残そう」とする意思が働き、それが文学となつたという。つまりは、「日本文学の始まり」は「言葉の力を残す」ことにはじまつたというのである。

万葉集における「言霊」の用例は、『万葉集』にみえる3例。柿本人麻呂歌集の2例と山上憶良の1例だけである。

・磯城島の 大和の国は 言霊(事霊)の 助くる国ぞ ま幸く(真福)ありこそ ⑬三二五四

〔訳・磯城島の 大和の国は言霊の助け給う国です。ご無事でいらしてください〕

▽遣唐使派遣の際の壮行歌。このヤマトの国は、言霊の靈威が發揮し、助けてくれる国なのだから「ま幸くありこそ(どうかご無事で)」。遣唐使一向が無事に戻ってくるようにと、祈る歌。当該歌は、右の反歌。

・葦原の 瑞穂の国は 神ながら 言挙げせぬ国 然れども 言挙げぞ我がする 言幸くま幸くま
せと 障みなく 幸くいまさば 荒磯波 ありても見むと 百重波 千重波にしき 言挙げす我は
「言挙げす我は」⑬三二五三

〔訳・葦原の 瑞穂の国は 神意のままに 言挙げしない国です それでも 言挙げをわたしはします お元気に ご無事でいらつしやいと つつがなく お元気であられたら (荒磯波) ありても一そのうちに逢えようと 百重波 千重波のように繰り返して 言挙げをしますわたしは 言挙げをしますわたしは〕

・神代より 言ひ伝て来らくそらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と語
り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり 人さばに 満ちて
はあれども 高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選
ひたまひて 勅旨(反して、「天命」と云ふ) 頂き持ちて 唐の 遠き境に 遣はされ 罷り
いませ 海原の 辺にも沖にも 神留まり うしはきいます 諸々の 大御神たち 船の舳に(反し
て、「ふなのへに」と云ふ) 導きまをし 天地の 大御神たち 大和の 大國御魂 ひさかたの 天
のみ空ゆ 天翔り 見渡したまひ 事終はり 帰らむ日には また更に 大御神たち 船の舳に み
手うち掛けて 墨繩を 延へたるごとく あぢかをし 値嘉の崎より 大伴の 三津の浜辺に 直泊
てに み船は泊てむ 障みなく 幸くいまして はや帰りませ ⑯八九四

〔訳：神代以来 言い伝えられたことですが（そらみつ） 大和の国は 国つ神の威徳の
いかめしい国 言霊の 助ける国だと 語り継ぎ 言い継いできました そのことは現代の
人もことごとく 目のあたりに 見ており知っています。人がいつぱい 溢れています
（高光る） 朝廷の中で 大御心のままに格別に重んぜられ 天下の政治も担当された 名あ
る家の子として お選びになり 勅旨を（大命と読む） 捧げ持って 唐国の 遠い境に 遣
わされ お出かけになるので 海原の 岸にも沖にも どっかりと 鎮座します もろも
ろの 海神たちは 遣唐船の船舳で（ふなのへに、と読む） 大使卿らをご案内し 天地の
大御神たち中でも大和の 大国御魂の神は（ひさかたの） 天のみ空を 飛び翔り 見渡して
加護したまい 務めを終え 帰朝される日には また更に 海原の神々は 船のへさきに
御手を掛けてご先導し 墨繩を 張ったように（あぢかをし） 値嘉の崎を経て 大伴の
三津の浜辺に 寄り道もせず お船は着くでしょう つつがなく お元気にいらして 早く
お帰りなさいませ〕

反歌

- ・大伴の 三津の松原 かき掃きて 我立ち待たむ はや帰りませ ⑤八九五
- ・難波津に み船泊てぬと 聞こえ来ば 紐解き放けて 立ち走りせむ ⑤八九六

▽憶良の「好去好来歌」の冒頭で、七三三年の遣唐使への送別儀礼の歌とされる。共通して遣唐使派遣の機会に際して、すでに特別な対外意識、つまりは海外である対中国（唐）という自国意識の高揚が「言霊」の語をよびおこし、その旅の困難さも相まって「言霊」の発動が求められている。

- ・言霊（事霊）の 八十の衢に 夕占問ふ 占正に告る 妹相寄らむと ⑩二五〇六

（訳：言霊の八十の巷で夕占をしたところはつきり占に出たあの娘はなびき寄るだろうと）
▽恋占いの歌で、占い（夕占）によって愛しい人が自分に心寄せるだろうという結果が出た喜びがうたわれている。「夕占」とは、夕刻に道に出て、道行く人の言葉によって吉凶を判断する占いであり、それが「ちまた」で行われたのは、道が交差し、たくさんの方が行きかう「ちまた」が、言葉にあふれ、それは言霊にあふれる場所だったからである。

▼遣唐使という対外的で困難な旅や、辛い恋の場面で、必要とされる時には、より良い方向への力(助)の発動が期待される、それが「言霊」であった。また語り継ぎ、目の当たりにし、今に至るといふ。

それでは「ことだま」とは何であろうか。

二種類の【たま】

- 1、「珠」「玉」：美しい石や貝、真珠、
- 2、「魂」「霊」：靈魂、靈力をさす

2つは同源の語と考えられ、折口信夫は

「靈魂のたまが形をとると種々な形態となつて現れるのであるが、其中で最優れた形態をとつて現れて来たものが即、玉であると考へられたのである。抽象的なたま(靈魂)のしむぼるが、具体的なたま(たま)に他ならなかつたのである。」「(「劍と玉と」1932年)

▽靈魂の具体的な形が球形であることを指摘する。抽象的な靈力を意味する「タマ」に対して、具体的に象徴するものが「玉」といふ。

・たま(靈)ぢはふ神も我をば打棄てこそ しゑや命の惜しけくもなし⑩二六六一

(訳：靈威の発動がある神も私を見捨ててほしい。ええままよ。この命の惜しいこともない)

▽神の靈威も「たま」と表現した。「ちはふ」は力が發揮されている意。恋がうまくいかず、自暴自棄になっている歌。

▽人のタマ(魂)は、通常ヒトの身体に内在する。そのタマは時にそこから遊離したりする。

人間の体内や特定のモノに宿り、ときにそこを出入りすると信じられた。「驚くこと」を「たまげる」といふのは「タマ+消る」、つまり魂が離れることをいう。タマの靈力が身体の生命作用を維持すると信じられてきた。ゆえに「たまげる」は、タマの活動が一時停止することという。タマが完全に身体から遊離してしまえば、持ち主は死んでしまう。身体とは「タマ」の入れ物であり、死者の身体を「なきがら」といふ。

・筑波嶺のをもこのもに 守部据ゑ 母い守れども 魂そ逢ひにける④三三九三

(訳・筑波嶺の山のあちこちに番人を置くように、母は見張っているがわたしたちの魂はもう合ってしまった)

▽女の歌。母は娘の管理者の立場にあつたため、悪い男が寄り付くことのないよう、厳重に監視していた。ところが娘はすでにこっそりと恋人をつくっていた。しかし、監視の目がうるさいので、なかなか逢うことができず、魂だけが出会つたというのである。「魂逢い」は実際には夢での出会いを意味していた。夢は身体から遊離した魂が見るモノとされた。

人間、さらにはひろく動物・植物などに宿り、心のはたらきをつかさどり、生命を与えている原理そのものと考えられているもの。身体を離れて存在し、また、身体が減じた後も存在すると考えられることも多い。男女の恋は、互いの魂の合一を求めることであり、男女が逢えずにいる時、その魂は、相手の魂との出会いを求めて、身体から遊離した。

▽人の魂の靈力は時として外部に作用を及ぼすことがある。

・我が主の 御靈賜ひて 春さらば 奈良の都に 召上げたまはね ⑤八八二

(訳・あなた様のご高配を賜つて春になったら奈良の都に呼び上げてください)

▽筑前国守・山上憶良が、帰京間近の大宰府の長官・大伴旅人に贈つた歌。「我が主」は大伴旅人をさす。「御靈賜ひて」とは「あなたのお力を頂戴して」という意味。春になったら、あなた様のお力で何卒、私を都に呼び戻して欲しいという、訴える。実際には、大納言となり帰京する大伴旅人の政治的な影響力なのだが、「ちから」ではなく「たま」で表現する。

それでは「言靈」の「こと」とは何か？

「事」とは、人と人、人と物との関わり合いによって、時間的に展開・進行する出来事、事件などをいう。古代社会では口に出したコト(言)は、そのままコト(事実・事柄)を意味し、「言」と「事」とは相通じるところがあり、両方とも「コト」で表現された。モノが言葉による認識以前に存在するのに対して、コト(事)は言葉による認識作用・形象作用によつてこそ形が与えられるためである。また現代においても「あのことは、絶対に言わないでね」といった際の「こと」は「事柄」でもあり「言葉」でもある。

※「もののけ」||「モノの気」/三輪山神・大物主神/目に見えないモノ・コトバにできないモノを「モノ」とした。

▽「言」と「事」が相通じるところから生じてくる信仰に「言挙げ」がある。

・我が欲りし雨は降り来ぬ かくしあらば言挙げせずとも稔(とし)は榮えむ⑩四一二四
(私が願っていた雨は降ってきた。これならば、私があえて言挙げせぬとも、秋の稔はゆたかであろう)

▽「言挙げ」の言葉が「事」として実現されるのは、その言葉に「言霊」が宿っているからだと考えられていた。▽大伴家持が越中の国守であった時、一カ月近く旱魃が起こった。雨具もの兆しが見えたとき、その雨雲が広がって雨をふらしてくれと祈りを込めた長反歌の二首がある。その三日後に雨が降り、家持はその喜びをこのようにうたっている

▼「言挙げ」とは、日常の言葉とは異なる様式によって、祈りをこめて言葉を発する行為であり、「言挙げ」の力によって「言」として発せられた内容が「事」として実現するという信仰である。ただし、言語呪術である「言挙げ」はむやみに行うものではなかった

・葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国然れども言挙げぞ我がする言幸くま幸くま
せと障みなく幸くいまさは荒磯波ありても見むと百重波千重波にしき言挙げす我は

「言挙げす我は」⑩三二五三

〔訳・葦原の 瑞穂の国は 神意のままに 言挙げしない国です それでも 言挙げをわたしはします お元気に ご無事でいらっしやいと つつがなく お元気であられたら (荒磯波) ありても一そのうちに逢えようと 百重波 千重波のように繰り返して 言挙げをしますわたしは 言挙げをしますわたしは〕

▼「葦原の水穂の国(国土の神話的呼称)は、神の加護があるゆえ、わざわざ言挙げしなくてもよいが、それでもあえて、旅の無事を祈って言挙げをします」とうたう。この国(日本)は基本的には「神ながら言挙げせぬ国」なのであり、「言挙げ」はよほどの危機を乗り越えるために行われるものであった。

古事記ではヤマトタケルという古代の英雄が伊吹山の神を打ち取ろうとした際に

「この山の神は、素手で直接討ち取ろう」とおっしゃって、その山を登っていった時、白い猪と、山のほとりで出会った。その大きさは、牛のようだった。そこで、倭建命は言挙げして、「この白い猪の姿をしているのは、この山の神の使者である。今殺さなくても、山から帰る時に殺すことにしよう」と大きな声で言い立てられて、山を登っていらつしやった。すると、山の神は激しい氷雨を降らして、倭建命を前後不覚におちいらせた。「この白い猪の姿になっていたのは、山の神の使者ではなくて、その神自身にはかならなかった。誤った言挙げをしたために、前後不覚におちいらされたのである」

『日本書紀』ヤマトタケルでは

「焼津から相模に進まれ、上総に向おうとして、海を望み、高言（ことあげ）して曰く「これは小さな海だ。跳び越えてでも渡ることができよう」と言われた。ところが海中ほどに至って、暴風がにわかになり、御船は漂って進むことができなかつた」（その後、弟橘姫が身をささげる）

▽記紀の言挙げの用例は、靈威がある言葉としての禁忌性から、不都合な結果が生じている。

▽「こと（言葉）」によって、対象となる未知なるモノの素性を意味付け、発言者の優位性を宣言する。劣位なるものへと位置付けをおこなう。「ことあげ」とは、人間がある目的達成の際、生涯となるかもしれない既知・未知な対象への畏怖感を克服するために、その対象の属性をあらかじめ良い方向に意味づける「言」や、素性をあらわにする「言」に変換する行為。言葉を間違えたならば大きなしっぺ返しも。

▽奈良県には葛城山があり、その神である「一言主神」は、その良い例である。『古事記』によると、

雄略天皇が臣下を従え葛城山に登ったとき、向かいの山を行列や装束も天皇とそっくりにして登って行く者を見かける。天皇がこの国に自分をおいて王はいないのに、何者かと問うと、それと同じことを答え、天皇は怒り、家臣とともに矢をつがえると、相手も同様にした。天皇が互いに名を名乗ろうと言うと、「吾は悪事（まがごと）も一言、善事（よごと）も一言、言ひ離つ神、葛城の一言主の大神なり」といったので、天皇は自分の太刀と弓矢をはじめ、百官の衣服まですべて献上し、拝礼した。すると一言主神は喜び、拍手してこの供物を受け、天皇が皇居の朝倉宮に帰るときには、長谷の山口まで

天皇を送った。

この「吾は悪事(まがごと)も一言、善事(よごと)も一言、言ひ離つ神」という名告りには、その「一言」の託宣に善悪両面の協力的な靈威が認められていたことをうかがわせる。そもそも「言靈」とは、コトバに宿ると信じられた靈力のことをいう。

それは善悪・吉凶両面に働くものであった。今も、多くの人が一言主神社に参拝し、その靈威をさずかるうとする。

「みこと」

記紀神話には「くのみこと」の名を有する神々が少なくない。「命(みこと)」とは「御言」の意味で、「言」に敬語の「御」が冠せられるのは、それが神の言葉であるから。「天皇」は「すめらみこと」と訓読されるが、「すめら」は、動詞「統べる」に由来する語。すなわち「すめらみこと」とは、「神の言葉を理解して統御する」といった意味が込められており。そうした能力と資格を有する存在を示していた。その神の言葉を理解し、それを臣下に伝えて国土を統治するのが天皇の役割だったのである。

万葉集の最終の歌に

・新しき年の初めの初春の 今日降る雪の いや重け吉事 ④四五一六

(新しい 年の初めの 正月の 今日降る雪のように もっと積れ良い事よ)

▽天平宝字三年(759)正月一日、因幡守大伴宿祢家持は、国郡司らの集まる国庁の宴での一首。瑞祥としての初雪に天皇(当時・淳仁天皇)の御代の榮華を託し、よい事よ重なれ、と言祝ぐ歌。自然の徴(しるし)が、歌のコトバの力によって理想的な未来の「事」がらを保証するという構造になっている。万葉びとは、コトバの力を信じ、期待しようとした証であり、コト(言葉)がコト(事柄)として実現されるとする「言靈」信仰の一端としてよく知られている。

※予祝(よしゆく)

『是非こうなりますように』と前もって祝福する事で、農耕儀礼などのお祭りなどにみられる。「新年あけましておめでとう」といえば、おめでたい一年がやってくることを祈念しての「よしゆ」。

▽そもそも「ことほぐ」とは、「言十祝ぐ」からなり、言葉で祝意を示すことであり、ことはに現実をあやつる力があると信じられていた日本古代の言霊思想を反映した語であるとみられる。ただし、これも常に發揮されるものではなく、状況・場面が重要となる。現代語においても単なる慶事であるというよりは日本古来の精神的伝統に合致した祝いごとについて用いられることが多い。

「摂津国風土記」逸文（夢野刀我野 神戸市兵庫区夢野）

昔、刀我野に夫婦の鹿がいたという。雄鹿には妻がいて、妻の雌鹿は淡路の国の野嶋にいたという。雄鹿は野嶋へ絶えず通い、妻との愛は格別親密であった。雄鹿が正妻の所に宿った翌朝、雄鹿が正妻の鹿に「昨夜の夢で、私の背中に雪が降り置くのが見られた。そうそう、ススキの一群も背中に生えていた。こういう変な夢は一体何の前兆だろうか」と語った。その正妻は夫の鹿がまた妻の所へ通って行くのを嫌って、心にもない嘘の夢判断を口にする、「背中に生えた草は、たくさんの矢が背中を射る前兆。雪が置いたのは、堅塩を突き砕いて鹿肉にまぶせる前兆。あなたが淡路の野嶋に渡ったなら、きっと船人に見つかり弓矢で射られて、海の上で死んでしまうわ。だから絶対に野嶋へは行かないで」と言った。その雄鹿は野島の妾へのいとしさに我慢できず、また野嶋へと渡った。その途中、偶然にも船に出会い、とうとう射殺されてしまったという。

夢占いの夢判断において、それよりも感情を優先し妾のところにおいてしまった牡鹿を物語る。一方で、妻の鹿は適当なウソをつき、実現してしまったことをさす。

時に口から出た言葉（ここでは相手に対する「死」が、「マコト」となるのである）。

ただし万葉びとにとっても、「言」は「事」ではなく、「言」でしかなかった。

・手に取るがからに忘ると海人の言ひし恋忘れ貝言にしありけり⑦二一九七

（手に取るのとたちまちに旅の愁いを忘れると土地の漁師が教えてくれた「忘れ貝」は、ただの言葉に過ぎなかったのだ）これは旅の歌であり、「忘れ貝」は二枚貝の片割れの一枚のことだが、その「忘れ貝」という名前が、恋しさを忘れるという事柄につながることを嘆いている。

・家島は名にこそありけれ 海原を我が恋ひ来^きつる 妹もあ^いらなくに⑬三七一八

(家島とは、名ばかりであったよ。この海原を私が恋焦がれて来た妻もないのに)

▽新羅に派遣される遣新羅使が、都への帰路、播磨国(今の兵庫県)の家島に至った時の一首。「家島」の「家」が名前のみで、実質を伴わないことに気づいたという表現。

『伊勢物語』東下り

名にし負はばいざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしやと

(「みやこ」という名を持っているなら、みやこ鳥よ、さあおまえにたずねよう。私の愛する人はすこやかに暮しているかどうかと)

▽「言霊」の信仰があり、他方で「事柄のない言葉」でしかなかったという感覚は矛盾しているようにみえるが、「言」が必ずしも「事」ではない意識が芽生えることよって、逆に「言」には言霊が宿り、「事」となって実現するという信仰が強く意識される。

※現代でも「名前負け」というコトバがある。

「剛(つよし)」なのに「貧弱・病弱」であったり、

純和風アパートに「ロイヤル」や「シャトー」(英語やフランス語で「王室」の意味)名前が不相応に立派すぎることに。「実体」と名が一致しないために、かえって見劣りすることをさす。「名は体をあらわす」現代もコトバは単なる記号ではないのである

・思はぬを 思ふと言はば

大野なる 三笠の社(もり)の 神し知らさむ ④五六一

・思はぬを 思ふと言はば

真鳥住む 雲梯(うてな)の 社神し知らさむ⑫三二〇〇

▼思ってもいないのに、思っていると云ったのならば神罰が下るでしょう。

※五六一番歌は大宰大監(大宰府の第三等官、正六位相当)の相伴百代の恋の歌。この三笠の社は大宰府の社※「雲梯」は奈良県橿原市雲梯町にある河俣神社かとされる。

相手の気持ちは目に見えない。見えない気持ちを言葉で形にする。形だけであるならば、それは何を信じればよいのか。

「言霊」の信仰とは、こうした発声行為における、とくに非常時やハレの場（祭式・儀礼など）での言葉に対する呪術的な信仰をいうもので、すべての言葉に靈威が宿るわけではない。

・恋するに 死にするものに あらませば 我が身は千度 死に反らし⑩三九〇

（恋をすると死にするとその苦しさで死ぬというのであれば、我が身は千度、死を繰り返しているだろう）

▽「恋」の極限的な状態を「死」をうたうことで誇張する。ここに「言霊」が発揮していたら、「恋」どころか本当に死んでしまうことになる。むろん、そこに話者の「死」への願望はない。生きているモノの生命が尽きることに、息が絶えることをいう語が「死ぬ」なのだが、『万葉集』では、「死ぬ」の語が好んで用いられるのは恋の歌に多い。恋とは眼前にない対象への不足感、欠乏感による心の作用をさすのだが、恋の極限の状態で、恋の切実さや苦しみの誇張表現として「恋死に」をうたう。その場合、恋焦がれるより、いつそ死を選んだ方がましだ、いつそ死んでしまいたいという表現が取られることが多い。

▽「恋死に」で、自身の恋の苦しさを「死」で表現する。現代人の感覚でいえば、かなりオバーと感ずるかもしれない。一方で「死ぬ」という語が、恋歌に多く用いられた一方で、「死」に最も関わりの深い挽歌（死に関する歌）では、「死ぬ」という語を用いることは忌避された。「恋死に」は自身に向けら、相手への、あるいは他者への「死」は表現されないのである。「死ぬ」の代わりに

・世間はまこと二代は行（ゆ）かざらし 過ぎにし妹に逢はなく思へば⑪四一〇

（一生は、ほんとに二度と繰り返さないらしい。死んだ妻に逢えないことを思うと）

「離る」「過ぐ」「罷る」などの語を用いて、「死」を婉曲的に表現する。比喻や誇張表現として「死ぬ」の語を用いるのは許容できても、現実の「こと（事柄）」として歌に詠みこむのは避けたのであろう。現代でいう「忌み詞」。

「言葉」の作用において「名」というものがある。

・紫は 灰さすものそ 海石榴市（つばきち）の 八十の衢に 逢へる児や誰⑫三二〇〇

（紫染めにその灰をさす椿。その名の椿市（つばいち）の八十の辻道で今お逢いしたあなたは誰ですか）歌垣の場において、偶然出会った男が、女の名をたずね求婚した場面。

「つばいち」とは奈良県桜井市金屋にあった古代の市(いち)。三輪と初瀬(はせ)の間で、飛鳥地方の入口にもあたっていたため、交通、交易の中心をなして栄え、歌垣も催された。「うたがき」…古代、男女が山や市(いち)などに集まって飲食や舞踏をしたり、掛け合いで歌を歌ったりして性的解放を行なったもの。元来、農耕予祝儀礼の一環で、求婚の場の一つでもあった。のちに遊樂化してくる。それに対して、女は

・たらちねの母が呼ぶ名を申さめど 道行き人を誰(たれ)と知りてか⑩三一〇一

(たらちねの母が私を呼ぶ名を申し上げようとは思いますが、行きずりのあたなをどんな人と知って、そうしましょうか)相手の素性を知らない(馬の骨)ので、それを拒む一首となっている。

▽名を知るということは、相手を知る事、すなわち領有することになる。ゆえに古代の結婚では男女間で名を問うことは求婚を意味した。現代に「あだ名」「諱」「戒名」「芸名」などいくつか種類があるように、古代でも複数あった。ここでの名前は「母が呼ぶ名」であり、通り名に対して本名をさす。本名を明かすことが求婚の受諾を意味した。故に女性は自分の名前を簡単には明かさない。

・人言は まごと言痛く なりぬとも そこに障らむ 我にあらなくに⑪二八八六

(人の噂は どんなにうるさく なるうとも それを気にする わたしではない)

▽「人言」は噂の意味。「こちたし」は「言十痛し」からなり、人の言葉、噂などが多くてうるさく、わずらわしい意。噂は恋する2人の逢瀬を妨げる障害として考えられていた。形のない言葉が「痛い」と表現されることである。

▽この歌はそのような障害をもとせせず、相手への一途な想いを訴える。(強い思いなのだけれども、相手のことや、その後のことを考えない浅はかさ、というか若さ。)

噂や評判によって「名前が汚れる」ことをとくに嫌う。会社の評判、家の名前、自身の名前、それはただの記号でしかないのだけれども良い意味でその名がたつことを願うところがあり今もむかしもかわらない。

まとめ

「言霊」は状況を見て発動を願うもの。また他者へ向ける際は言葉を選ぶもの。

言葉は、感情や思考を形象化する。人を慰め、慈しむこともある一方、「事」(こころ)のない言葉は、人を傷つけ、死に追いやってしまうことさえある。「言十痛し」と表現するのは、言葉という目に見えないものが我々を時に傷つけるからにはかならない。その発信元は、どこかといえば、ほかならぬ人の心である。

私は担当する授業の冒頭において学生に説明することばがある。

日本には古来、言霊という信仰があり、コトバには靈威があると考えてきた。どうぞみなさん、口にする言葉に自覚的になってください。とくに相手に向けることばは、祝意ともなり、凶器ともなるということを自覚してください。ひるがえって自分自身を傷つけることにもなる。と。我々が当然としてきたコトバの力への自覚が、顔がみえないことにより、より暴走気味になりつつある。今こそ、「言霊なきは吾国」として、発する言葉への重みを考えるべきだと思います。

最後に私から「言霊」をのせ「言挙げ」を。

「大和の国は 言霊(事霊) の 助くる国ぞ」

「言幸くま幸くませ(どうぞぞお元気で)」

「またお会いしましょう」と。

ご清聴ありがとうございました。